

中米の古典期文明形成過程の一考察(その一)

—特にマヤの南低地帯を中心として—

貞 末 堯 司

はじめに

メキシコ、ユカタン半島の南部、グアテマラ、ペテン地方、パッション川流域を中心とする地域は、いわゆる、マヤ南低地帯であり、マヤの古典期文明隆盛の地であったことは、よく知られている。しかし、この地域に、何時頃、どのようにして、古典期文明の基礎が築かれたのかについては、数多くの不明確な点があって、十分に解明されているとは、いえないのが現状である。文明が形成されていく過程には、数多くの要因が関係している。それだけに、いろいろな方面からの考察が可能になってくる。本稿は、古典期文明が成立するはる以前に、マヤの南低地帯に出現し、この地で、その後の発展をとげ、いわば、古典期文明の母体となり基盤となり得たと考えられる文化について考察したものである。紙数の都合上、編を分けざるを得なかったので、本稿は(その一)として土器文化の面からマヤ南低地帯の古典期文明形成の基盤について考察を試みてみた。資料的には、極めて限られたものであるが、マヤの南低地帯には、どのように古い時期の土器文化の存在を認めることができる。考古学上、土器は時を測る尺度として利用できる。マヤ南低地帯の、これら一群の古い基盤的土器文化は、今後、さらに解明さるべき多くの問題をもっている。特に、土器文化相互の編年関係を確立することは、マヤ古典期文明形成の解明に欠くことのできない前提であろう。(その二)以下には、これらの問題を含めて、土器文化以外の面からもマヤ古典期文明形成の基盤について考察を加えてみたい。

1. 編年について

マヤやインカなどの高文明が存在したメソ＝アメリカや南米アンデス地帯の大きな地域の編年的体系には、今世紀の中頃三つの考え方があった。これらはいずれも、新大陸の広大な地域に存在した先コロンブス文化を包括的に把握しようとする試みであったといえよう。一つは、発展論的な理解の仕方であり、二つは、文化統合論とでもいえる提案であり、最後は、社会、経済史論的把握の

表明であった^{①②③}。これらの考え方の内容については、別の機会にゆずるとしても、三者はいずれも、時間的、空間的に限られたものであったため、意図された程には、先コロンブス文化を適確に把握しているとは言えない面があった。特に、文化が形成されてくる過程の認識やそれが、時間的、空間的に大きな差をもって出現する場合などの説明には、かなりの困難がともなったのである。

1958年、G. R. ウィリーと Ph. フィリップスによって、石期 (Lithic)、古期 (Archaic)、形成期 (Formative)、古典期 (Classic)、後古典期 (Post Classic) の五つの段階 (Stage) が提案された。提案の当初は、勿論、文化的発展段階といった意味が強かったが、これら五段階の考え方は、次第に新大陸原住民文化の歴史を考察する場合の時間的尺度として適用されるようになり、或る意味で時代的、歴史的区分といった性格をもつようになった。しかし、発掘を中心とする考古学上の資料の増加や民族学的、人類学的研究の成果は、このような五段階論では、満足できないようになり、1966年、改めて、メソ=アメリカに関しては、石期にかわって、パレオ=インディアン (Paleo-Indian) 期、古期にかわって、食料採集・初期栽培期 (Food-Collecting and Incipient Cultivation)、という人間の食料採集行為の経済的、生態的概念が導入され、さらに食料獲得の大変革を意味する経済的体制が付け加えられ提案された^④。そして、古典期文化を一つの頂点として、その前と後といった考え方から、従来の形成期にかわって、先古典期 (Pre-Classic)、そして、この期を早期、中期、後期の三期に細区分する考え方が提唱された。古典期以後は、従来通り後古典期 (Post-Classic) を設定したが、古典期も後古典期も、共に前期、後期の二期に細分された。従って、先古典期以後は、七期の細期をもって考えられるようになった。しかも、これらの区分には、従来よりは、¹⁴Cによる年代測定資料を用いるなど絶対年代を規準として、なお一層「時の区分」といった意味の強いものになったため、はるかに歴史的な時の意味をもち得るようになったのも事実であった。また、その後、この様な編年に対して、用語上の変更や細部について新しい提案もなされ^⑤、先古典期の開始時期を農業の発生におくか、土器の出現時におくかなどの基本的な考え方の違いはみられたが、先古典期、古典期、後古典期といった用語上の相異はなかった。ただ、先古典期については、その相対的な年代と区分の仕方に考え方の相異がある。特に、マヤ低地帯においては、先古典期より以上に、古典期文明に重点がおかれるのは当然で、先古典期の理解や編年的処理に独自の考え方が提案されてもいる。例えば、ユカタン低地の北辺部、ジビルシャルトゥン (Dzibilchaltun) 遺跡の調査を基盤として、以後、ユカタン中央低地、南カンペッチ州のリオ=ベック (Rio Bec)、

プーール (Xpuhil 或は Xpujil), ベカン (Becan) 遺跡などを中心とする土器
 3年では、基本的には、先古典期、古典期、後古典期を設定するが、先古典期
 前、後二期に細分し、その後に原古典期 (Proto-Classic) を新しく設けてい
 。古典期を前、後の二期に細分する点是不変だが、さらに終末古典期 (Ter
 inal Classic) 期を追加して考えようとしている^{⑦⑧}。後古典期は、前、後二期細
 分を採用しているが、古典期の前に原古典期、その後に終末古典期をおこう
 する考え方は、古典期自体をさらに細区分し得る資料があるからである。勿
 し、マヤ古典期文明の編年は、長期計算に基づくマヤ暦が、その基盤であるの
 に当然であって、ティカル発見の石碑29号の日付、8, 12, 14, 8, 15, が292
 に相当することや、10, 3, 0, 0, 0 が 889年に相当することなどから、
 の始まりと終末が年代的におさえられているのである。同様に古典期前期、
 後期の区分も、マヤ暦 9, 5, 0, 0, 0 から 9, 8, 0, 0, 0 の約半世紀
 間にわたってのマヤ地域における石碑、建築物の建設の停滞する時期を規準と
 していることは、よく知られているところである。このような暦の体系が出現する
 以前の編年を行う場合には、¹⁴Cを始めとする各種の年代測定法や発掘資料に
 基づく相対的編年に依拠せざるを得ないのである。先古典期という場合も、そ
 の年代の決定に対しては、考古学上の資料の相対年代や絶対的年代が基礎にな
 っているわけである。

以上簡単に、メソ＝アメリカの編年に関してのべたが、本稿では、古い方か
 ら、パレオ＝インディアン期、先土器・萌芽農耕期^⑨、先古典期、古典期、後古
 典期という五期に大別し、本稿で特に問題となる先古典期を前、中、後の三期
 に細区分し、更に前期を I, II, III の三小区分、中期を同様、I, II, III の三
 小区分、後期を I, II の二小区分として、先古典だけを三期八小期区分として
 考えることにした^⑩。また、古典期は、マヤ暦に従って、前、後期の二期区分、
 後古典期も同様、前、後期二期区分とし、従来からの諸説に従って充分であろ
 うと考えた。

先述の如く、本稿では、マヤ南低地帯の古典期文明が形成されていく過程で
 り、基盤的文化の発現を考察の対象としたため、先古典期の編年が、特に重要
 にならざるを得なかった。つまり、ペテンやパッション川流域地帯を中心とす
 るマヤ南低地帯の古典期文明を作りあげた基盤的文化が、何時頃、何処で、お
 こったかが、本稿の主題であるため、土器の相対的編年に基づく先古典期の編
 年のでき得る限りの適正な組み立てを考えてみたわけである。ただ、先古典期
 文化も、先土器期と非連続ではあり得ない。しかし、マヤ南低地帯における先
 古典期以前の資料は、ひじょうに限られたもので、殆ど不明である。従って、

このような不確実な資料で先土器期と先古典期との連続を論ずることは、現在不可能に近い。しかし、マヤの低地帯周辺で比較的良好に調査され、 ^{14}C による年代も判明している先土器期の遺跡も確実に存在している。例えば、メキシコ、チャパス州の西方のサンタ＝マルタ（**Santa Marta**）洞窟では、スクレイパー、チョッパー、ポイントなどの石器の他に、乳棒状石器、磨石などの磨製石器が発見され、 ^{14}C 年代は、 $6780 \pm 400 \text{ B. C.}$ 、 $5370 \pm 300 \text{ B. C.}$ の二つが得られている^⑪。また、グアテマラ市の近郊サン＝ラファエル（**San Raphael**）で、クローヴィス（**Clovis**）型の黒曜石製尖頭器が発見された^{⑫⑬}。これは採集品であるため、層位関係は不明であるが、明かにクローヴィス型尖頭器と断定できるため、パレオ＝インディアン期ないしは、先土器期の資料となし得るわけである。この他の先土器期の資料は、グアテマラのトトニカパン（**Totonicapan**）の近くに、ロス＝タピアレス（**Los Tapiales**）遺跡が発見され剥片石器が出土している^⑭。また、グアテマラの黒曜石の原産地、エル＝チャヤル（**El Chayal**）にも石器文化の存在が報告されているが^⑮、これには、反論もあって必ずしも明確でない面がある^{⑯⑰}。この他、18世紀にグアテマラで採集された石器についての考証などもあるが^{⑱⑲}、以上のグアテマラ発見の三者は、マヤ圏の数少ないパレオ＝インディアンの資料として重要である。この他、メキシコ、チャパス州のソコヌスコ（**Soconusco**）地域、太平洋岸地帯、グアテマラのオコス（**Ocos**）地方には、多くの先史時代貝塚が知られている。中でもチャンチュト（**Chantuto**）遺跡では、先土器期の文化層が発見されているが、まだ不明な点も多い^㉔。

この様に、資料的には、現在なお問題となる面はあっても、いわゆるマヤ圏周辺にも、パレオ＝インディアン文化に関する資料が判明しているので、将来必ずさらに充実されるようになるであろう。

パレオ＝インディアンや先土器期の資料は別としても、低地マヤ地域の文化は、先古典期という長い時を経過して、古典期へと推移していった。古典期は、文字通りマヤ文明が開花した時であり、文明という名に価する高度の内容をもつものであった。グアテマラのペテン（**Petén**）低地帯を中心とするマヤ古典期文明の基盤的文化は、従って先古典期に存在したということが考えられるわけで、この意味でも、先古典期の編年的な研究は、今後とも重要であるといわなければならない。

さて、先古典期は、前述のように、三期八細分が、編年的には可能であろう。特に、南低地帯マヤの先古典期の文化を理解するためには、この編年が説得力をもってくるのである。例えば、後述するように、ユカタン低地の土器とチャパス州やグアテマラの高地帯、海岸地帯をふくむ、いわゆるミセエ＝ソケ（**Mixe-**

loque) 地域²¹の土器とを対比する場合、直接的には、先古典期前期 I が、対比され得るわけで、従来のように、先古典期の「古い所」といった莫然とした視点ではなく、もっと明確な時を決め得るからである。

さて、先古典期に関して三期八細分を編年基準としても、それぞれが、どのような年代に相当するかが、重要な問題でなければならない。換言すれば、詳細な編年的な構成ができればできる程、それに相当する実年代が重要になってくるわけであり、特に先古典期が開始する時期を年代的には、何時頃におさえいくかが最大の関心事となってくるのである。

先古典期三期八細分の年代が、それぞれどのような資料で決定されるようになったかについては、可能な限り後で述べることにして最初に、結論的ではあるが先古典期前期 I 以下の実年代的数値をあげておこう。

先古典期前期 I は、先古典期の開始を意味するが、前2000年頃から前1500年頃の約500年間に相当すると考えることができる。また同 II は、前1500年頃から前1200年頃の約300年間。次の III は、前1200年頃から前1000年頃の約200年間に相当すると考える。換言すれば、紀元前2000年頃を先古典期開始の時とおさえ、その後の約1000年間を先古典期前期の継続期間と考えるのである。次に、先古典期中期 I であるが、これは、前1000年頃から前800年頃の約200年間、同 II は、前800年頃から前600年頃の約200年間、さらに III は、前600年頃から前400年頃の約200年間と考える。つまり、先古典期中期は、前1000年頃から前400年頃の約600年間と解釈するわけである。最後の先古典期後期 I は、前400年頃から紀元前後頃の約400年間、そして同 II は、紀元前後頃から紀元後100年頃の約100年間と考える。この場合、紀元後100年頃から以降を古典期の開始と考えるか、前述のように原古典期として、紀元後約300年頃まで、つまり最も古い、しかも最も確実なマヤ暦での日付をもつティカル (Tikal) の石碑29が建立された頃までを、原古典期として独自に編年するか、または、古典期前期に編年するかは、重要な研究テーマとして残るが²²、本稿では、これについて論ずる余裕がないので、他の機会にゆずりたい。

先古典期の三期八細分については、以上のような実年代を想定するが、先述のように、その細部についての解釈や先古典期開始の時期についての見解などには、なお異論があることも事実である。例えば、G.R.ウィリーは、先古典期を前2000年頃から紀元後300年頃と考えている。そして前、中、後期の三期区分を行っているが、各期の小期区分は行っていない。また、先古典期が前2000年頃に始まると想定する点は、食料獲得法の変革という農耕的生活の定着化をうけてくるようである²³。しかし、先古典期の開始時期を、何によって決めるか

は、ひじょうに重要な問題であるといわねばならない。食料獲得法の重大な変化、いわば定住的農耕社会の誕生といった面をその指標とするか、土器製作の開始といった技術的側面をとるか、その時期の始まりの設定に大きな影響を及ぼすからである。本稿では、前2000年頃、メソ＝アメリカのほぼ全域にわたって土器が製作されるようになった時、つまり、土器製作の開始は、時間的にはもっと古く考えられる資料もあるが^②、土器製作が、技術的にも、形態や文様の上からも、社会的に確立し、人間の生活に必要な日常具となり、しかも、明確な時の里程具として利用できる程に広く行われ、人間生活の中に固定化されてきた時、これが約、前2000年頃と解釈するのである。土器のもつこのような機能を強調することによって、人類文化の一つの画期と解釈することの是非についてはここでは論じないが、マヤ地域とその周辺地帯、いわば「マヤとその隣人諸文化」との間に、その文化的系譜を土器の様式によって追求できるようになった時が、前2000年頃と考えるわけである^③。

次に、マヤの南低地帯やその周辺地域の土器文化について考察するが、先述のように本稿は、先古典期を古典期文明の母体的文化と考え、先古典期のさまざまな土器文化を考察することによって、マヤの南低地帯に先古典期の何時頃、どのような土器文化が出現したかを明らかにすることを主眼としている。従って、マヤの南低地帯に現われた最初の土器文化人が、直接的な南低地マヤ文化の形成者であったとしても、最初の土器文化のその後の発展やその土器文化を、マヤ古典期文明とどのような関係において把握するか、などの問題については、稿を別にしてふれることになろう。

2. 先古典期の土器について

A. 先古典期前期Ⅰの土器

この時期には、二つの土器文化領域が、ペテンやパッション川流域を中心とするマヤ南低地帯の周辺部に存在したことが判明している。

まず、そのうち一つの土器文化圏ともいえる地域は、ユカタン半島を中心とする低地帯であり、他はテワンテペック (Tehuantepec) 地峡部から南東部の太平洋岸をふくみ、チャパス州のほぼ全域と、グアテマラのメキシコ国境地帯から太平洋岸低地帯の一部を含んだ地域である。(Fig. 1. 参照)。

前者は、マヤの北低地帯とよばれる地域であり、ペテンなどのマヤ南低地帯とは陸続きである。これら北低地帯と南低地帯とは、いわゆるマヤ文化圏であって

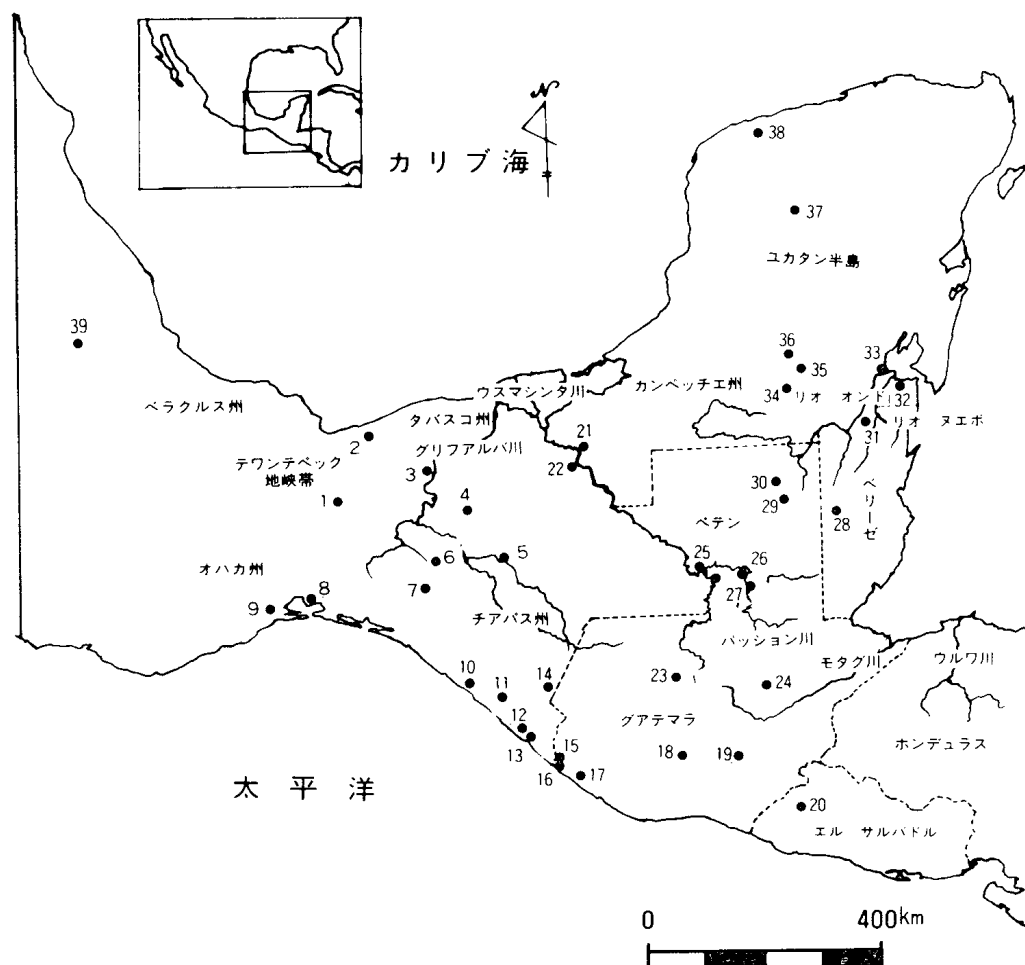


Fig. 1

- | | | |
|---------------|--------------------|-----------------|
| 1 サン＝ロレンソ | 14 イサパ | 27 セイバル |
| 2 ラ＝ペンダ | 15 ラ＝ビクトリア | 28 バルトン＝ラミエ |
| 3 チョントルパ | 16 オコス | 29 ティカル |
| 4 サン＝イシドロ | 17 サリナス＝ラ＝ブランカ | 30 ワシャクトウン |
| 5 チアパ＝デ＝コルソ | 18 サン＝ラファエル | 31 クエジョ |
| 6 サンタ＝マルタ | 19 エル＝チャヤル | 32 セロス |
| 7 ミラドール | 20 チャルチュアパ | 33 チェツマル |
| 8 ラグーナ＝ソペ | 21 トリニダド | 34 スプフィール |
| 9 テワンテペック | 22 ティエラ＝ブランカ | 35 リオ＝ベック |
| 10 パホン | 23 エル＝ポルトン | 36 ベカン |
| 11 アキレス＝セルダン | 24 サカフト | 37 マニ |
| 12 アルタミラ | 25 アルタル＝デ・サクリフィシオス | 38 ジビルシャルトウン |
| 13 パソ＝デ＝ラ＝アマダ | 26 サヤシチェ | 39 グアダルーペ＝ビクトリア |

〔注〕 1～39の遺跡及び都市の位置は、この地図上に正確に現わせない場合があり、できるだけ忠実に表記しようと努めたが、多少実際の位置よりは、ずれているものもある。お詫して、お断りしておきたい。

も、先古典期前期 I には、前者に明確な土器文化が存在したが、後者には、土器文化が確認できないといった著しい相違が認められる地域である。一方、テワンテペック地峡部から南東部地域は、いわゆるミセエ＝ソケ地域であり、テワンテペック北西部の先オルメカ (Pre-Olmec) 或は早期オルメカ (Early Olmec) 文化との強い関連が認められる地域である。このようにこれら両地域には、形式的に異った系譜をもつ、二つの土器文化が存在したと考えられる²⁶。

ユカタン半島の北低地帯では、短頸壺、把手付球形壺 (以下、把手付壺という)、注口付壺形土器の三型式を主体とする土器文化が広く認められ、これに胴部が下脹れになる直上口縁の平底皿 (以下、下脹れ皿という)、丸底鉢、尖底状か丸底を呈する球形状短頸細口水甕 (以下、短頸細口水甕という) 形土器が加わって独得な土器文化が知られている^{27,28} (Fig. 2. 参照)。

これらユカタン低地土器文化は、ユカタン半島東部海岸、特に、ベリーゼ (Belize. 1981年独立) のクエジョ (Cuello) 遺跡から発見される遺物を標識とするものであるところから、ベリーゼの東部低地帯がその起源地とも解されている²⁹。クエジョ遺跡は、チェツマル (Chetzmal) 湾に注ぐ、メキシコとの国境の川リオ＝オンド (Rio Hondo) とリオ＝ヌエボ (Rio Nuevo) にはさまれる地帯のほぼ中間にあり、リオ＝ヌエボの河口に近いセロス (Cerros) 遺跡からは、内陸部へ約30km入った所にある。クエジョ遺跡からの出土土器のうち、短頸細口水甕、下脹れ皿、把手付壺、注口付壺などは、先古典期前期初頭のユカタン低地における基本的な土器文化の内容を象徴するものであるが、これらに加えて、強く胴部が外反する皿形土器 (以下、外反胴皿形土器という) も下脹れ皿型土器とともに一つの基本的な型式を構成している。

このように複雑な内容をもつクエジョ遺跡の土器文化をもって、ユカタン北部低地帯の最古のスワージー (Swasey) 系土器文化の標識としているが、ユカタン低地帯を中心として広がる短頸壺や把手付壺、特に短頸細口水甕は G.W. ブレイナードが、ユカタンのマニ (Mani) 洞窟から発見した同形のものと形式的には同じものであり³⁰、このような点を考えると、スワージー系土器文化は、N. ハモンドのいうように、或は、前2500年頃すでに低地帯一帯に広がった文化であったかもしれないのである³¹。スワージー文化複合 (Swasey Complex) の流れをくむと考えられるマニの水甕土器文化を含めて、ユカタン低地に広がる短頸壺形土器の系譜は、ベラクルス州、サン＝ロレンソ (San Lorenzo) 遺跡のオホチ (Ojo-chi) 文化層にも認められるものであり、この文化層は、テワンテペック地峡部以南のオコス (Ocos) 文化層と併行するものであることが知られている³²。しかも、サン＝ロレンソがオルメカ文化の中心地域に立地しておりオホチ文化層がメキ

シコ湾岸での最も古い土器文化を代表するという点は、大いに注意される場所である。サン＝ロレンソでは、オホチ文化層の次には、バヒオ (Bajío) 文化層が知られている。この文化層には、土器の表面に深い溝や縦方向に大きめの凹みめをつけるなどして、ひょうたんやかぼちゃの形に似せた壺形土器が知られている。この様な壺形土器は、一般に、テコマテ (tecomate) 土器 (Fig. 2. - 9 ~ 12 参照。以下、テコマテという) と呼ばれるもので、その特長的な器形の中にも頸部が、わずかに立ち上がるもの、口唇部にのみ凸帯をもつものなどもあるが、殆ど、全部が無頸の球状及びややひしゃげた球状の壺である点に、最も特長がある。テコマテは、タバスコ州のチョンタルパ (Chontalpa) 遺跡のモリナ (Molina) 文化層³³ にも知られているが、先古典期前期初頭の、ユカタン低地のスワージー系土器文化には、その存在は確認されていなくて、チャパス州太平洋岸のソコヌスコ地方³⁴、グアテマラの太平洋岸のオコス遺跡などに、極めて特長的な器形である³⁵。このように、太平洋岸に分布する土器型式とユカタン低地帯に広がる土器型式とが、メキシコ湾岸の最も古いオホチ土器文化層に認められ、次のバヒオ文化層へと継続しているという事実は、先古典期前期 I 頃に、メキシコ湾岸の後にオルメカ文化の中心となった地域に、異なった二つの系統の土器文化が合流するような事態がおこったのではないかと推測させるのである。しかし、このことを確認するためには、ユカタン低地の土器文化と器形、文様などにおいて明かに異なった土器文化をもつオハカ州、チャパス州などをふくむメキシコの南東部からグアテマラの一部をふくむ広い地域の先古典期前期 I の土器文化をさらに考察する必要がある。

メキシコ東南部太平洋岸からグアテマラの太平洋岸を含む地域には、バルラア (Barra) 文化層を最古として、テコマテを主体的な土器とする土器文化が広がったが、これは次のオコス文化層においては、さらに広い範囲にわたって知られるようになった³⁶。

この地方最古の文化層と考えられるバルラア層は、チャパス州のアルタミラ (Altamira) 遺跡で確認されたが、薄手のテコマテを主体とするものであり、酸化焼成が行われ、明色を呈する器体には、口縁部に刻線文をもつもの、全体に刻線文を施し、口縁部だけを無文にするものなど、特長的な文様を施している³⁷。器形は、この他に平底で直立壁をもつ皿形と考えられる破片も出土しているが、ビーカー状の平底鉢が、存在したことは確かなようである。バルラア文化は、アルタミラ周辺を主として、太平洋岸に限られる地域に広がったが、次のオコス土器文化は、はるかに広い範囲にわたって分布し、複雑な土器文化の一面をのぞかせている³⁸。

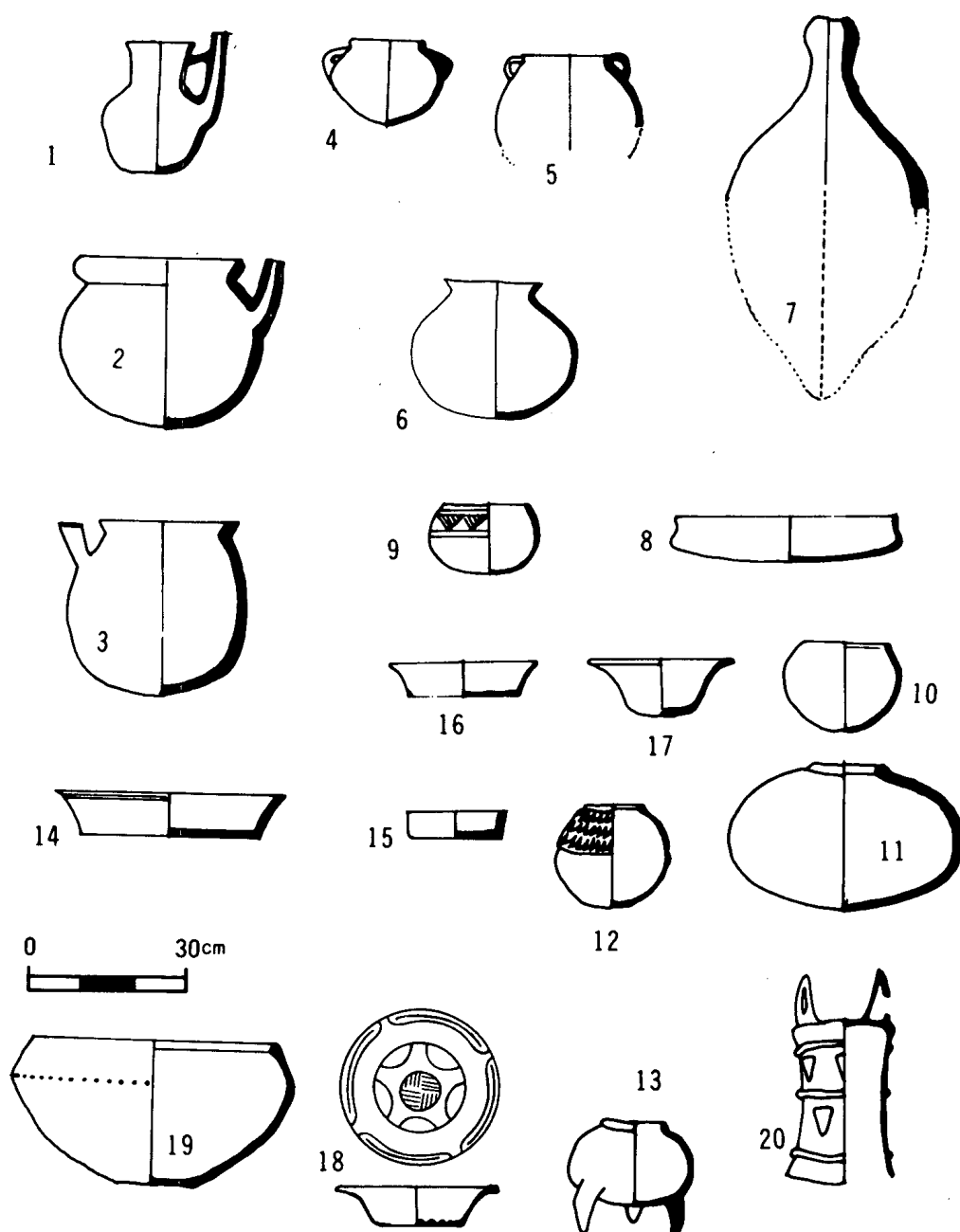


Fig. 2

先古典期前期及び中期初頭土器模式図

1～3、注口付壺形土器。 4、5、把手付壺形土器。 6、短頸壺形土器。 7、短頸細口水甕形土器。 8、下脰皿形土器。 9～12、テコマテ(11、ひしゃげテコマテ)。 13、長三足テコマテ。 14、外反胴皿形土器(ラ=ベントA I式)。 15、箱形土器(ラ=ベントA I式)。 16、17、外反胴皿形土器。 18、特殊口縁皿形土器。 19、ラ=ベントA II式鉢形土器。 20、香炉。 1、9、10、12、13、16、17、18、20、は、Wearer, M.P.(1972)の模式図による。 2、3、4、5、8、11、自己資料による。 6、Franch, J.A. "Manual de Arqueologia Americana" 1958, p. 339のFig. 261.-7による。 7、Lowe, G.W. (1978)、p. 348のFig. 11.-6の模式図及び、Brainerd, G.W. (1958)、p. 171, Fig. 30.-Cによる。 14、15、19、Laporte, J.P. (1972) p. 82、による。

オコス文化は、グアテマラのラ＝ビクトリア（La Victoria）遺跡、オコス（Ocos）遺跡を標識とするが、バアルラア文化に比べると器形、文様技法、焼成法などに複雑さが増している。器壁のひじょうに薄いテコマテ土器型式が主体であるが、平底の皿形土器が、種類も量も多くなっている。そして、バアルラア文化層には認められなかった長三足テコマテが出現する（Fig.2. -13）。

この土器型式は、チャパス州のアキレス＝セルダン（Aguiles Serdan）太平洋岸のパソ＝デ＝ラ＝アマダ（Paso de la Amada）、グリファルバ川上流のアンゴスツラ谷のエル＝カルメン（El Carmen）遺跡などからも知られているもので、オコス土器文化の広範囲な広がりを示している^③。また、三足土器が、この時期から瀕出する傾向があり、三足皿、三足鉢が多く製作された。板状や中空円筒状の三足が用いられているが、三足テコマテに比べれば、はるかに小さなものである。

文様技法には多くの手法がとり入れられ、ロッカー・スタンピング文^④、沈線文、印章文^⑤、黒色磨研、赤色磨研などが現われてくる。また、イリデッセント（iridescent）とよばれる特殊な紅彩色をもった土器も発見され、南米、エクアドルのバルディビア（Valdivia）やパナマのモナグリジョ（Monagrillo）貝塚などとの関連が指摘される^{⑥⑦}。

土器文化の多様化とともに、オコス層からは胸部、大腿部を極端に誇張した女性土偶が、初めて知られるようになる点も注意されなければならない。土偶の頭髮の表現や目、口などの表情には、オコス様式とでも呼べる独得の手法が用いられているが^⑧、このような土偶は、先古典期前期Ⅰのユカタン低地帯には、全く存在しないものである。しかし、先オルメカ、早期オルメカ文化と深い関係をもったミセエ＝ソケ地域には既にオコス層から人形土偶が出現している点は注目されるであろう。ユカタン低地や南低地帯をふくめて、人形土偶がいわゆる低地マヤ地域に出現してくるのは、時期的にははるかに後のことであり、先古典期中期以降になって初めに知られるようである^⑨。このことも、両地域間には、本質的に異質な土器文化が存在したことを暗示しているものと考えられる。また、バアルラア及びオコス両文化層からは、建物などの建築物遺構が確認されているわけではないが、アルタミラ近くのパソ＝デ＝ラ＝アマダ遺跡で、低いマウンドと居住区の中央部らしき場所に公共的広場と思われるものがつくられた痕跡があるが、明確な構築物とはいえないようである^⑩。また、両層には、黒曜石の破片、石核から剥離された剥片が出土しているが、これらはおろし金の歯として利用され、マニオクをおろすのに使用したと考える説があるが、反論もある^⑪。

また、チャパス州の太平洋岸のパホン(Pajon)遺跡からは、オコス文化の系統をひく大量のテコマテが発見されてオコス文化の西北への広がり、さらにテワンテペック地峡部をこえてその北部、西部との交渉を物語る資料が得られている⁴⁸。パホン遺跡出土土器の80%はテコマテであり、残りはこの地以外の場所で製作された輸入土器であることがわかっている。また、テコマテは、ロッカー・スタンピング文、指頭押圧文、赤色塗彩文、沈線文などと多様であるが、パホン遺跡の最古の文化層であるデュナス(Dunas)層からは、オコス文化と同型式のテコマテが確認されるとともに大形のテコマテが大量に発見されている。大形テコマテは、パホン遺跡では製塩に利用された土器であったと考えられ、パホン遺跡のマウンド1に発見される莫大な量の灰層と焼土の中から発見される大形テコマテの無数の破片は、製塩作業と深い関係をもった土器であったことを物語っている。また、パホンの人々は、海産物、特にエビを捕獲し、これを加工して食料としたらしく、その一部は、塩とともに交易品として他の場所へ運ばれたようである。このことは、輸入土器とともに、広範囲な交易の存在を暗示するものであろう⁴⁹。

また、パホン遺跡より更に、太平洋岸を西北へ北上して、テワンテペック地峡部の南側に位置するラグナ=ソペ(Laguna Zope)遺跡は、六つの文化層が確認されているが、最古のラグニイタ(Lagnita)層は、長三足テコマテ、三足鉢以外のオコスの土器型式を含む文化層である⁵⁰。特に文様技法は、オコスに見られた殆どすべての技法があり、この他に、焼成法を意識的に変えて作ったと考えられる器壁上に特別な斑点文を描き出す特殊焼成法が行われた。これの最も代表的な土器は、口縁部が白色で、体部を黒色に焼成したテコマテであるが、これは体部の黒色を強調することによって、口縁部の白色が極立つように焼成された特殊焼成白・黒土器(以下、特殊白・黒土器という)とでも名付けられる土器である。メソ=アメリカでのこの種特殊焼成法は、この地に見られるのが最初のことであり、モレロス州のような、もっと北の地域からは知られているが、テワンテペック近くのオハカ州などには、全く知られていない。更に、文様技法として注意されるのは、磨消法か削り取法によって、土器表面の調整を行ない、口縁部周辺にだけ、斜行沈線文か、交叉沈線文かを施す手法が知られるようになってきていることである。テコマテを中心とする太平洋岸土器文化は、先古典期前期初頭に、テワンテペック地峡部の更に西部、北部地方と接触をもっていたことが知られている。特に、前述のラグニイタ層からは、多くの黒曜石が発見されているが、この黒曜石の産地は、全総量の約50%が、ラグナ=ソペ遺跡から北西へ約400km離れたグアダルーペ=ヴィクトリア(Guadalupe

Victoria) から齊らされたものであり、残り25%は、約500km離れたグアテマラのエル＝チャヤルから、あとの25%は、西に約500km離れた、ゲレロ州のエル＝トコティト (El Ocotito) から齊らされたものであることがわかっている⁵¹⁾。

このように、先古典期前期 I 頃からのオコス文化の広範囲な広がりやその活かし、土器の分布や黒曜石の原産地との交渉路によって確認することができるが、オコス期の実年代については、まだ明確になっているとはいえない面がある。チャパス州やグアテマラの太平洋岸の遺跡で、早期オルメカ文化と密接な関係をもつ、クアドロス (Cuadros) 文化層の下層から、オコス式土器が発見され、更に、オルメカ文化の中心地である、ベラクルス州のサン＝ロレンソ遺跡の早期オルメカ文化、つまり、サン＝ロレンソ層の下層からオコス型式類似の土器が発見されている。しかし、サン＝ロレンソ遺跡でのオコス層相当文化層は、先述の如くオホチ層であり、この層以後には、少なくとも二つの漸移文化層が確認されている。一つは、先述した下層のバヒオ層であり、他は、上層のチィチャラス (Chicharas) 層である。サン＝ロレンソ層、つまり、早期オルメカ文化層は、チィチャラス文化層の上にのる文化層であり、バヒオ層が前1500年頃と考えられているので、オコス及びオホチ層は、少なくともこのような層位関係から考えると、前1500年頃には、すでに存在していたと考えなければならない。そして、オコス層の下層から知られるバアルラア層は、 1649 ± 160 B. C., 1710 ± 225 B. C. の二つの ^{14}C 年代が知られている⁵²⁾。これらを参考にすれば、その相対的年代として前1800年頃から前1500年頃の間を想定せざるを得なくなるのである⁵³⁾。これは、オコス文化の系譜を仮に、南米、エクアドルの太平洋岸文化との接触に求めるならば、その海岸文化チョレラ (Chorrera) 文化の年代、前1700年頃と適合するわけである⁵⁴⁾。エクアドルのチョレラ文化との関係を考えても、少なくともオコス文化は、メソ＝アメリカのオルメカ文化の先行者であったということはいえるわけであろう。

ただ、注意されるべきことは、ラ＝ビクトリアのオコス文化、及びそれに続くコンチャス (Conchas) 文化は、南米の北部文化との様式的な強い関連を示していることである。このことは、海洋航海術をもった人達が、ひじょうに広い範囲にわたって活動したことを示すものであるかも知れない。また、同時にオコス土器文化が、メソ＝アメリカの太平洋岸から西部、北部の内陸部へ広く広がった原因の一つを説明しているかもしれないが、結論を出すには更に多くの資料が必要であろう。

B. 先古典期前期IIの土器

サン＝ロレンソ遺跡のバヒオ層出土土器をもって、標識とすることができよう。テコマテは、大量に発見されているが、特殊な器形をもつ土器も出現する。それは、平底のポットであるが、頸部が著しく細くなり、それに反して、口縁部が強く外反するものである。この器形は、サン＝ロレンソより東方には発見されていないので、サン＝ロレンソでの先オルメカ期に、このような器形が独自に発現したか、外部からの影響のもとに生まれたか、注意されるところであろう。また、バヒオ文化層には、特殊白・黒土器とか、中空の人形土偶とかのオコス土器文化の伝統が強く残っている点を考慮すればテワンテペック地峡部での最初の明確なオコス系土器様式の出現と考えることができよう⁵⁹。また、タバスコ州のチョンタルパ(Chontalpa)地方には、モリナ(Molina)文化層が確認されているが、この層からは、テコマテ、特殊白・黒土器、形象土器の他に、区画文、沈線文、ロッカー・スタンピング文、石製容器など、オコス様式の殆どすべてが認められる。つまり、バヒオ文化はタバスコ州のチョンタルパを拠点として、四方へ散らばった傾向を示し、モリナ文化は、バヒオ文化のチョンタルパでの表出と解することができる。事実、チョンタルパを起点とするバヒオ文化の影響は、東方のウスマシント川の流域にあるサン＝ホセ＝デル＝リオ(San Jase del Rio)遺跡に、わずかながらでも認められ、ロッカー・スタンピング文様をもつテコマテ様式土器の破片及び繊維物を押圧したテコマテが発見されている。サン＝ロレンソより、距離的にははるかに東方の地に、この様なバヒオからモリナ文化層の内容をもつ遺跡が発見されていることは、特に注意を要するところであろう⁶⁰。

次に、チャパス州のサン＝イシドロ(San Isidro)遺跡のマウンド20の最下層のボンバナ(Bombana)層、同じく中央盆地のチアパ＝デ＝コルソ(Chiapa de Corzo)遺跡、サンタ＝マルタ(Santa Marta)遺跡のコトラ(Cotorra)層の両層にも先古典期前期IIの土器文化が発見されている。なお、サンタ＝マルタとチアパ＝デ＝コルソ遺跡のコトラ文化は、サン＝ロレンソのバヒオ文化層の次に現われる文化、チィチャラス文化層との併行関係が認められる所から、先オルメカ文化が、メキシコ南東部のシエラ＝マードレ山系のほぼ中央部に出現した例証と考えることができよう⁶¹。またチョンタルパのモリナ文化層、サン＝イシドロのボンバナ文化層、そして前述のコトラ文化層などに、メキシコ湾岸、後のオルメカ文化の中心地となったサン＝ロレンソ遺跡のバヒオ文化が、広く認められるということはテワンテペック地峡部の東側とマヤの南低地帯の西側

とにはさまれた地域に、特にこの土器文化が広がっていく何らかの理由があったのではなかろうか。現在の限られた資料では、速断できないにしても、このことは、先古典期前期IIの時期におこった一つの重要な変化であったと考えてもよからう。また、先古典期前期IIの土器に関して、最も注意すべきことは、西ホンデュラスにおけるバヒオ系土器の発現である。このことは、ユカタン北低地帯やマヤ南低地帯をとりかこむ、その西側と東南側だけに同系列の土器が分布しているわけで、明らかにこれら土器文化が広がっていた径路、移動の方向などについて一つの暗示をあたえるものであろう。

なお、前述のサンタ＝マルタ遺跡でのコトラ文化は、チィチャラス文化よりは、幾分バヒオ文化に類似した要素をもっていると考えられているが、その¹⁴C年代は、1330±200B.C.という数値が知られている⁸⁹。これは先古典期前期IIの年代についての重要な参考資料になろう。また、サン＝イシドロ、サン＝ロレンソ両遺跡に、二本足のメタテ (metate) が発見されている。恐らく、チィチャラス層に伴うものと解されているが、この奇妙な形のメタテは、グアテマラの太平洋岸のティキサテ (Tiquisate) 遺跡からも発見されているもので、メキシコ湾岸からチアパス州の山岳地帯を通して、太平洋岸にまで広がった特殊メタテとして注目されるところである。

なお、西ホンデュラスに発見されたバヒオ文化土器は、区画内ロッカー・スタンピング文をもつ長頸壺で区画内につけられたロッカー・スタンピング文は、明らかにオコス土器文化以降の伝統的な施文技法であり、その系譜は、文化の移動、文化の接触といった問題とともに重要であるが、ここでも、タバスコ州チョンタルパを一つの拠点と考え、それから更に東への径路を通して、ベリーゼに達し、スワージー系土器文化との接触を径て、ユカタン半島東海岸を南下して、ホンデュラスに達する径路か、或は、ベリーゼ低地からグアテマラの東部及び中央低地帯を通して、ホンデュラスに至る道かの、両者を想定することができるようであるが、結論を出すまでには、なお多くの資料を必要とするであろう。

C. 先古典期前期IIIの土器

この期の土器は、テワンテペック地峡部の北側や南側にも明確に認められ、先古典期前期IIの土器の分布よりも、もっとはっきりした範囲に広がっている。北側では、オルメカ文化の本拠地であるサン＝ロレンソ遺跡にその一つの拠点が確認されており、早朝オルメカ文化のサン＝ロレンソA文化層がこれに相当する。A文化層の時には、巨大なプラットフォームの建設が始まり、石造彫刻

には、オルメカ式彫像技法が現れ、多くの巨大人頭像が製作された⁵⁹⁾⁶⁰⁾。

早期オルメカ文化は、広い範囲にその影響を及ぼし、土器の面では、器肌を削り取って文様を描く技法（以下、削り取文という）黒色磨研土器、特殊白・黒土器、などが出現する。器形には、テコマテが伝統的に残っているが、大きな台付香炉土器 (Fig. 2.-20) も初めて製作されるようになり、香をたく宗教的儀礼が行われたことを推定させるとともに、人形土偶が数多く作られるようになるのも、見逃せない特長である⁶¹⁾。サン＝ロレンソ A 層の土器文化は、チャパス州の太平洋岸や、その内陸部、更にグアテマラの太平洋岸などにも知られ、特に、チャパス州のイサパ (Izapa) 遺跡やアルタミラ遺跡などを中心とするクアドロス (Cuadros) 文化層に集中的に確認されている。また、同州のミラドール (Mirador) やミラマル (Miramar) 遺跡のバック (Pac) 文化層での最近の発掘資料は、サン＝ロレンソ A 文化層やクアドロス文化層と全く同じ内容をもつこと示しており、更に、同州のサン＝イシドロのカカワノ (Cacahuano) 文化層も、これらと極めて類似した内容をもつことが判明しているといわれている。このことは、先古典期前期 III 頃にメキシコ湾岸と太平洋岸のソコヌスコ地域の諸遺跡とが、密接な文化的関係をもっていたことを物語るものといえよう⁶²⁾。

しかし、実際にどのような径路を通っての接触が行われたのかは、正確にはわからないが、ミラドールやミラマル両遺跡をふくむチャパス州の中部及び南部を流れるグリファルバ川の上流や中流と、その西のラ＝ベント川などが、メキシコ湾岸と太平洋岸との接触に大きな役割を果たしたものと考えることができよう。

なお、グアテマラのサリナス＝ラ＝ブランカ (Salinas la Blanca)、チャパス州のイサパ (Izapa)、アルタミラ、アキレス＝セルダンの諸遺跡は、太平洋岸でのクアドロス文化層の典型的な内容をもっているが、¹⁴C年代は、前978年、前928年、前765年と三つの年代が知られている。前二者に比し、後者が約200年の時代差をもっている点に問題が残るようであるが、現在では、クアドロス文化層は、前二者の年代を参考にしてもよいものと考えておこう⁶³⁾。

また、サン＝ロレンソ A 層関係土器と考えられる土器様式が、はるか南のエル＝サルバドルに発見されるという事実がある。同国のチャルチュアパ (Chalchuapa) のトック (Tok) 層に発見される土器文化がこれであるが、同遺跡の木炭による ¹⁴C年代は、前998年を示している⁶⁴⁾。また、グアテマラのアルタ＝ベラパズ州のサカフト (Sakajut)、バアハ＝ベラパズ州のエル＝ポルトン (El Porton) では、先古典期前期終末頃から先古典期中期初頭の土器文化が確認された。いずれも、グアテマラの高地帯に発見された、最初のクアドロス文化層及びパ

パック文化層として注目されるところであるが、太平洋岸の先古典期前期Ⅲ文化はその終末頃から、次の時期にかけて、グアテマラの山岳地帯で開花したと考えることができる点で、両者の資料は、極めて重要な一面をもっている。

グアテマラのベラパズ地方が、マヤの南低地帯と境を接し、先古典期後期以来、古典期にかけては、高地帯と低地帯を結ぶ主要な交渉路となっていたことは、すでに古くから指摘されてきたが^⑦、太平洋岸からの文化的な浸透があったとすれば、それは、グアテマラの山岳地帯にまず結集され、ここから更に、北方のピテンやパッション川流域低地へと伝播していった可能性を推定することが正しいであろうか。クアドロスやパック両文化層に認められる土器文化が、グアテマラ高地帯に出現する事実は、このことのよい例証となり得るであろうが、マヤの南低地帯での文化の発現を土器文化の系譜の上から考察する場合、ユカタン低地帯に、先古典期前期Ⅰ以来存在した土器文化の、その後の系譜について考察することが必要となってくるのである。つまり、先古典期前期初頭頃からユカタン半島の低地帯に住んでいた人達の土器文化こそが、マヤの南低地帯文化の直接の先祖と考えられる土器上の類似性や同一性を示しているのではない、更には、ユカタン低地に広がった何等かの文化の影響が、マヤの南低地帯文化の基盤的文化と密接な関係をもったのではないか、といったことが、中心問題となってくるのである。

D. 先古典期中期Ⅰの土器

テワンテペック地峡部以東のタバスコ州、その東南のチャパス州、更にグアテマラ南部の高地帯をふくむ広大な地域の多くの場所で、サン＝ロレンソ文化、つまり早期オルメカ文化の終末頃から石碑や石像など、石造彫刻品の破壊的行跡が行われた事実が知られている。サン＝ロレンソA層文化に伴った巨大人頭像は移動され、その一部は投棄され、彫刻された石碑や石彫品は削られたり、壊されたり、埋められたりした。しかし、一方では、ラ＝ベント(La Venta)を中心とするオルメカ文化の繁栄が、この時を境としておこってくるのである。

サン＝ロレンソA層文化、つまり、先古典期前期Ⅲの衰亡にかわって登場したラ＝ベント文化は、巨大構造物の建設という大土木事業によって、その発展の口火をきった。これとともに、コンプレックスA(Complex A)とよばれる巨大構築物を中心とするラ＝ベント特有文化が、栄えることになるが^⑧、異常なまでに複雑化した埋葬儀礼や副葬品を伴う墳墓、埋葬と関係をもつ建築物などとともに、その土器文化は、ラ＝ベント＝コンプレックスA式土器(以下、A式土器という)とよばれる特長をもつものである^⑨。A式土器は、正確にはⅠ式及

びII式に分けて考えるべきであるが、平底の外反胴をもつ皿形土器及び長箱形土器ともいえる特殊な箱形土器を主体とするものである(Fig.2.-14, 15)。

A式土器の出現をもって始まるラ=ベンタの繁栄の直前には、前述の如く広範囲に破壊の痕が見られたが、A式土器の系譜は、チャパス州のチアパ=デ=コルソ遺跡での、ディリィ(Dili)層の土器文化、また、同州の海岸地帯のホコタル(Jocotal)層の土器文化と類似するものである²²。しかし、ディリィ文化層とホコタル文化層との編年的関係については、なお問題があるにしても、ディリィ層文化が、早期オルメカ土器系文化の影響のもとに出現したことは疑いないところであり、特に、A式土器の中心的土器である皿形土器は、両者に全く類似するものが存在しているのである。

皿形土器は、この期の最も普通の形態を示めすものであるが、ラ=ベンタの発展につれて、量的に増大する傾向をもっている。この皿形土器は、口縁部内側に一本ないし二本の沈線文を施すのを特長としているが、この手法はその後の皿形土器の形態に特別な変化を齎す原因となったようである。これは、強く外反した口縁をもつ皿形土器の口唇部を四等区画に分け、各区画に一本の沈線を施す特殊な口縁部をもった皿形土器(Fig.2.-18. 以下、特殊口縁皿型土器という)へと発展したことが考えられる。また、直立壁をもつピーカー形土器やテコマテ土器の表面に刺突によって、人間の目を形どった文様を施すようになるのもA式土器併行のディリィ土器文化に認められる特色である。

また、先古典期中期Iには、白色系から橙色系の明色土器が主体をなしているが、器形は皿形や特殊口縁皿形土器、そして伝統的なテコマテがマヤの南低地帯西側の外縁部の広い地域にわたって発見される点も重要な特色と考えることができよう。ラ=ベンタの繁栄が始まり、それとともに、強い影響がディリィやホコタルの土器文化に現われてくることは判明していてもマヤの南低地帯には、この種土器は発見されないのである。これに反して、ホンデュラスの先古典期中期の土器文化層と考えられているロス=ナランホス(Los Naranjos)遺跡のハラル(Jaral)層は、明らかに早期オルメカ文化からの関係を示しており、更に同国のヨホア(Yojoa)単色土器系とコマヤガ谷のヤルメラ(Yarumela)1に伴う、平たいフライパン状皿形土器は、同様にテワンテペック地峡地帯との強い関連をもったものと考えざるを得ないであろう²³。ホンデュラスへの、このような影響が、テワンテペック地峡部からどのようなルートを通っておよんだのかについては、明確さを欠く部分があるとしても、二つの径路を想定することができるのではなかろうか。

つまり、エル=サルバドルのチャルチュアパには、古い方からトク(Tok),

コロス (Colos), カル (Kal), チュル (Chul), カイナク (Caynac) 前期, 後期, ベク Vec) などの11の文化層が知られているが, ホンデュラスとの関係で問題になるのは, 先古典期中期初頭に比定されるコロス文化層である。この文化層から, 先述した先古典期前期IIIに見られた同遺跡のトク文化層とは異った土器相が認められることである。第一の特長は, 把手付壺形土器と注口付壺形土器が現われるのに反して, テコマテは, 殆ど見られなくなることである。また, 皿形土器は存在しているが, 特殊口縁皿形土器が現われる点も注意されよう。

このような特長だけをもって, コロス文化層をユカタン低地土器文化の伝統的影響によって生れたというように速断することはできないにしても, 先古典期中期初頭には, マヤの南低地帯の外側, 特に, テワンテペック地峡部の東側から南東部, グアテマラ高地帯からエル＝サルバドル, ホンデュラスにかけて大きな土器文化の上に変化がおこったということは認めなければならないだろう。このように考えるとホンデュラスへの径路は, 山岳地帯を避けて, ユカタン低地を東方へ向い, ユカタン半島の東海岸を南下する一つの径路とテワンテペック地峡から東南方向への径路といった二つの路を想定することができるのではなかろうか。

エル＝サルバドルのチャルチュアパのコロス文化層の土器には, ベリーゼやユカタン低地のスワージー系土器に現われる注口付壺や把手付壺形土器の存在とともに, これらに極めて類似した内容が認められる。このことは先古典期中期初頭に始まったラ＝ベンタを中心とするオルメカ文化の繁栄と決して無関係ではなかったのである。ラ＝ベンタの発展は, 中米の広い範囲に様々な文化的変化をもたらし, 各地に大きな影響を及ぼしていったことは多くの資料によって認められるところであるが, これにともなっておこった中米の各地の土器文化の変化は, グアテマラのペテン低地, 特に, ウスマシント川の中流域や, その下流のパッション川の流域地方に, 特別な土器文化を導入する契機を与えたものと考えられるのである。

タバスコ州のウスマシント川流域のエミリアノ＝サパタ近郊のトリニダド (Trinidad), ティエラ＝ブランカ (Tierra Blanca) 両遺跡に見られる先古典期中期初頭のチウアアン (Chiuwaan) 層には, テコマテと外反胴皿形土器が認められるが, これは, 明らかにテワンテペック地峡部から最も東に寄った地域でのテコマテを標識とするオコス以降の土器文化の浸透と考えなければならない。つまり, ラ＝ベンタの発展は, チャパス州やグアテマラの太平洋岸などの伝統的な土器文化を, タバスコ州の東端にまで広げることになったわけで, このような動きが, ベリーゼ北部の先古典期中期の代表的なロペス (Lopez) 土器文化を

刺戟したことは推測に難くないところである。このようにしてスワージー式土器以来のユカタン低地一帯に広がった土器文化は、先古典期中期初頭以降ペリーゼのロペス土器文化によって、更に南の方向へ動きはじめたか、その影響する範囲を広げていったと考えることができる。これが、ペテン低地帯のティカル(Tikal)、ワシャクトウン(Uaxactun)遺跡によって代表されるマヤ南低地帯の土器様式にも大きな影響を及ぼしたとみることができよう。つまり、ティカルのエブ(Eb) コンプレックスに出現する注口付壺形土器、把手付壺、皿形土器などの土器様式はスワージー土器文化の伝統を濃厚に示しており先古典期中期初頭におこった、一つの大きな文化的な波動がそのⅡ、Ⅲ期以降に確立されるペテン低地の土器型式の基盤的な、根源的な要素を導入させる原因になったと考えられるのである^{②⑤}。このことは、同時にワシャクトウンのマモン(Mamon)土器文化との関係において論じられるべき要素をもっているが^②、タバスコを中心とするカリブ海沿岸からユカタン低地までの先古典期中期初頭頃におこったさまざまな文化的な動きの中で、ひじょうに重要な役割を担ったのは、ウスマシタ川を利用する運行ではなかったのではなかろうか。

タバスコ州のほぼ全域、カンペチェ州の一部、そして、ペテン低地やパッション地方の大部分に広い流域をもつ、テワンテペック以東の最大の川、ウスマシタの中・上流域は、文字通りマヤ古典期文明の本拠地である^②。先古典期前期のウスマシタ川中・上流域土器文化の資料は殆どないといってよいが、先古典期中期初頭以後、マヤ南低地帯では、まず土器文化の上に新しい動きが見え始めるのである。マヤ南低地帯での最初の、しかも確実な文化の証拠は、先古典期中期初頭頃に現われ、年代的には、前800年頃の土器文化の中にあると考えてよかろう。

ウスマシタ川の一支流、パッション川が分れる場所に位置するアルタル＝デ＝サクリフィシオス(Altar de Sacrificios)遺跡と、更に上流のセイバル(Seibal)遺跡から、この南低地帯に最も古い土器が知られている。前者のものは、セー(Xe)土器、後者のものは、リアル(Real)或はリアル＝セー(Real Xe)とよばれる土器文化である^②。

ラ＝ベンタの繁栄は、先述のように、トリニダドやティエラ＝ブランカのチウアアン層文化に強い影響を与えたが、この影響は、ウスマシタ川を遡行して、更に奥地へと広がっていった。これが、アルタル＝デ＝サクリフィシオスにセー土器の出現を齎すことになった最大の要因であり、更に奥地のサヤシチェ(Sayaxiche)^②やセイバルにも達することになったと考えることができる^②。地理的には、ウスマシタ川は、セイバルより更に南方に遡行できるが、リア

ル＝セー土器は、セイバルより以南には確認されていないのが現状である。

セー土器は、器面調整が十分でない粗製土器であるが、テコマテ及び把手付壺形土器、外反胴皿形土器が主体である。テコマテには、いわゆる「ひしゃげテコマテ」とよばれる器形、つまり、球状のテコマテを押圧して、球がややひしゃげた形になったテコマテがともなっている。また、文様は、刺突文や沈線文があったことはわかっているが、セー土器の資料は、極端に限られているので、文様技法の細部については、不明な点が多い。アルタル＝デ＝サクリフィシオスのセー土器の中には、白、赤、黒などの単色土器があったようであるが隆起帯をもつ土器も知られており、貼付文系の土器の出現として注目されるところである。ただ、把手付壺は、ユカタン低地、及びベリーゼ東北部に存在した伝統的な器形とひじょうに類似しているが、器形が大きくなっている点に相異がある。このような点からマヤの南低地帯の最古の土器文化の中にも、ベリーゼを中心とする東北部低地帯やユカタン低地帯からの強い影響を認めないわけにはいかない。また、セイバル出土のリアル＝セー土器は、白のスリップをかけ、表面調整を行った数少ない例の一つであるが、特に、この傾向は、「ひしゃげテコマテ」に著しい傾向である。セー土器もリアル＝セー土器も、内容的には殆ど類似性をもつもので、同一の根源をもち、ほぼ同じ時期の土器文化と考えて差支えなからう。

セー土器の出現をもって、マヤ南低地帯、特にパッション川流域低地の最初の文化と考えることができるとすれば、南低地帯マヤのその後の発展の基盤となったのは、まさにこのセー土器製作人でなければならなかったろう。現在の資料による限り、パッション川流域低地帯をふくむグアテマラ、ペテン低地帯の最古の住人は、セー土器文化人であったといっても、この人達の社会はいかなるものであったか、また、彼等はマヤの南低地帯に、その後発展したマヤ古典期文明の本当の創始者の役割を果たさだろうか、少なくともそのような発展をなし得るための力と能力を保持していただろうか、といった疑問に答えるための考古学、民族学、人類学などの資料は、極めて貧弱なものである。特に、その社会構成、食料経済、住居などに関する基本的な資料は、ひじょうに限られている。しかし、アルタル＝デ＝サクリフィシオス遺跡の周辺には、セー土器の破片とともに1100m×400mの範囲に、極めて小さなマウンドが散在している。この遺跡のグループBの下のセー土器層には、一つの構造物が発見され、広場を真中にして四つの建物が存在したらしい。また、小マウンド群は、グループBから数百メートル離れたところにも四つの集団が発見されるという知見もある。小マウンドを仮に家族単位の家屋だと考えても、その人口は適確に推

定できるものではないが、セイバルでの知見も加味して、アルタル＝デ＝サクリフィシオス及びセイバルとも100人ぐらいの集団ではなかったかと推定されている^⑩。

セー土器の存在は、ペテン低地での最初の人間の移住を物語るものとして、ひじょうに重要な事実である。しかし、セー土器が、どのような径路を通して、ペテン低地に入ってきたのかに関しては、ウスマシント川の遡行説とは反対に、グアテマラ高地帯からの浸透と考える意見もある。

グアテマラのエル＝ポルトン、サカフト両遺跡には、セー土器と極めて類似した土器が発見された。グアテマラ高地帯のこれら遺跡に発見される土器文化の中に、ペテン低地での最も古い様式である土器と類似したものがあるということは、グアテマラ高地帯とその海岸地帯とに先古典期前期以来存在した土器文化との系譜を無視して考えることはできない。換言すれば、マヤの南低地帯の西方及び南方の外縁部には、バアルラア、オコス文化を始めとする古い土器文化の伝統があり、それらの伝統が、エル＝ポルトン、サカフト両遺跡に見られるような土器文化の基盤であるので、ペテンでのセー土器もこのような長い土器文化の系譜の上で考えなければならないし、その伝統を無視することはできないというのである。テワンテペック地峡部から南東部にかけての山岳地帯は、ペテン低地やマヤの南低地帯への門戸であり、グリファルバ川の上流から下って、メキシコ湾岸への通路、更には、ウスマシント川の源流地域から、ペテン低地へ下行する道、更には、東方のモタグ川を下って、東海岸に出て、その沿岸を北上する交通路など、多くの通路や交通路といったものが想定され、それらのいくつかはかつて実際に利用された可能性が濃厚である^⑪。従って、エル＝ポルトン、カサフトなどの高地グアテマラの遺跡は、チャパス州やグアテマラの海岸地帯文化と密接な関係をもつことは勿論、その文化が北方へ、東方へと発展して、マヤ南低地帯への移動も、その一環として考えられなければならないので、セー土器製作者も、グアテマラの南部高地帯からその北の低地帯へ入ってきた人達であったろう、とするのがこの議論の論点であろう^⑫。

しかし、ここで注意されなければならないことがある。それは、前述のようにセー土器には、ユカタン低地帯の古い土器文化の伝統的要素が認められる点であろう。セー土器に認められる、このユカタン低地系土器文化の要素は、どのような径路で入ってきたのであろうか。また、これと関連してティカルやワシャクトウン遺跡のエブやマモンなどの土器文化に認められるユカタン低地系土器要素は、どこから由来したのであろうか、といったことが、問題になってくるのである。前述のように、セー土器製作者達は、ペテン低地の最も古い移

住者達であったが、彼等の土器文化の要素の中に、先古典期中期Ⅱ、Ⅲなどのその後の土器文化の基盤となるものが存在していたとすれば、それは、南の高地帯から入ってきた要素なのか、それとも逆に北や東の低地帯から入ってきた要素によるものなのか、といった問題でもある。

この問題に明確な解答を与えるのは、ひじょうに困難な仕事であるが、本稿での結論的な意味をも持っているので、次に述べておこう。

ラ＝ベンタの繁栄とともに、その大きな影響がメキシコ湾岸ベラクルス州南部やタバスコ州西部を中心として各地に広がっていった事実は、誰も否定できないところであろうが、この動きに最も敏感に反応したのが、タバスコ州西部から文字通り平坦で、大小の河川、湖沼、バホ(Bajo)^⑧などを利用できる人達であった。彼等は、先古典期前期Ⅱの時に、チョンタルパにモリナ文化や更に東にサン＝ホセ＝デル＝リオなどの遺跡や文化を創った人達の子孫であったとも解釈できるが、ベラクルス南部から、タバスコ州を径ての東方への道は、海岸及び河川利用によって、かなり容易であったと推定できる。いわば、この「平坦な開かれた路」は、ベラクルスからタバスコ、そしてユカタン低地へと続く文化移動の道でもあったことは想像に難くないところである^⑨。そして、この道を通った明確な文化的痕跡は、先古典期中期初頭までの土器文化の系列から見る限り三回あったのではないかと考えられる。その最初の移動は、スワージー系のユカタン低地土器文化の誕生をもたらしたメキシコ高地系文化であったろう。先古典期前期Ⅰのユカタン低地系土器は、ユカタン独自発生と考えるべきか、外来のものであるとすべきかはにわかに決定できない問題であるが、ここでは、メキシコ中央高地帯から、前述の道を通して、ユカタン低地に到着した人達が残したものであらうと考えておきたい。それは、短頸細口水甕土器及び把手付壺形土器の系譜は、メキシコ中央高地系と考えられる要素を強くもつものであるからである^⑩。そして、二番目は、先古典期前期Ⅱのモリナ文化である。これは、ウスマシタ川の流域にまで明確にその痕跡を残しており、チョンタルパでの編年でモリナ層を最も古く編年するのには、誰も異論のないところであらう^⑪。三番目は、セー土器の直接的な刺戟者と考えられるチウアアン土器文化である^⑫。トリニダド、ティエラ＝ブランカ両遺跡の位置する場所は、ウスマシタ川の中流域であり、それは、もうユカタン低地の西端部でもある。チウアアン文化は、ラ＝ベンタの繁栄と無関係ではあり得なかったし、ユカタン低地への浸透は、さらにユカタン低地中央部や東方ベリーゼ低地帯への強い影響となって現われたわけで、これが、直接的には前述のように、スワージー系土器の後継者と考えられるロペス土器文化への強い刺戟となって、その広が

りが始まったのであろう。従ってこの三番目の西方からの影響の波が、ウスマシタ川を奥地へと遡行させる原因となったと考えられるのである。従って、セー土器の製作者達は、チウアアン文化の直接的な影響下にあった人達であったと推定できる。つまり、セー土器人達は、パッション低地への浸透時にはすでに、ユカタン低地系土器文化の影響下におかれていたということは以上の事実によって推察することができよう。アルタル＝デ＝サクリフィシオス遺跡やセイバル遺跡のセー土器文化は、こうして、チウアアン層土器文化以来の伝統的なテコマテ系土器文化と新しく加わったユカタン系土器文化の要素を併せもつようになったのである。このように、セー土器文化にユカタン低地系土器の要素が強く認められたのは、それが、南高地帯よりもはるかにユカタン低地帯土器文化の伝統の中に存在したからであり、ラ＝ベンタの隆盛とともに活動を始めた、ユカタン低地系土器文化の影響を強く受けざるを得なかったからである。

セー土器のその後の発展については、興味のあるところであるが、前700年頃からセー土器は、ワシャクトウンを中心とする低地マヤの中核地帯で最も古く編年されているマモン (Mamon) 土器への変容を始めるという考え方もあるようである^⑧。確に、ティカルやワシャクトウンを中心とする低地マヤのいわゆる中核地帯とパッション川流域を中心とするパッション地帯とは、先古典期中期IIの頃から、土器文化に関してはもちろん、他の面においても著しい変化が認められるのである。また、チウアアン文化の刺戟で南低地帯へ大きな影響を及ぼしたロペス土器は、バルトン＝ラミエ (Barton Ramie) 遺跡の最古の土器、ジェニー＝クリーク (Janny Creek) へと確実に、その影響力を及ぼしていった形跡が濃厚である。

先古典期中期II以降、ユカタン低地帯をふくむマヤ圏には、更に大きな土器文化の変化が現われ、古典期文明への一階段としての先古典期中・後期文化は、一層複雑な様相を呈し始めるのである。

これらのことについては、次の稿に譲らねばならない。

(未完)

〔その一〕〔註〕

- ① Armillas, P.
1948 A Sequence of Cultural Development in Meso-America in A Reappraisal of Peruvian Archaeology, ed. by W. C. Bennett p.p105-11. *Society for American Archaeology Memoir No.4*. Menasha.
- ② Steward, J. H.
1948 A Functional-Developmental Classification of American High Cultures in A Reappraisal of Peruvian Archaeology, ed. by W. C. Bennett p.p.103-104 *Society for American Archaeology Memoir No. 4*. Menasha.
- ③ Willey, G. R. and P. Phillips
1955 Method and Theory in American Archaeology II : Historical- developmental Interpretation *American Anthropologist* Vol. 57. p.p. 723-819.
- ④ Willey, G. R. and P. Phillips
1958 Method and Theory in American Archaeology *University of Chicago Press*. Chicago.
- ⑤ Willey, G. R.
1966 An Introduction to American Archaeology volum 1, North and Middle America *Englewood Cliffs, New Jersey*. Prentice-Hall.
- ⑥ Sanders, W. T. and B. Price
1968 Mesoamerica; The Evolution of a Civilization, *New York:Random House*.
- ⑦ Andrews, E. W. IV
1965 Archaeology and Pre-history in the northern Maya Lowland in Handbook of Middle American Indians ed. by R. Wauchope Vol.2. *University of Texas Press*. Austin.
- ⑧ Ball, J. W.
1977 The Rise of the Northern Maya Chiefdoms: A Socio- processual Analysis in The Origins of Maya Civilization ed. by R. E. W. Adams p.p.101-132. *University of New Mexico Press*. Albuquerque.
- ⑨ ここでいう「先土器」という言葉は、道具としての土器が生活の中に固定化される以前という意味が強い。
- ⑩ 先古典期を三期八小期区分とする考え方には、Gareth W. Lowe の東部メソアメリカ地域についての編年観が大いに参考になった。
- ⑪ Lowe, G. W.
1978 Eastern Mesoamerica in Chronologies in New World Archaeology ed. by R. E. Taylor and C. W. Meighan p.345. *Academic Press*. New York.
- ⑫ Coe, M. D.
1960 A Fluted Point from Highland Guatemala *American Antiquity* Vol. 25. p.p.412-413.

- ⑬ Coe, M. D.
1973 *The Maya Pelican Book* p.p.42-43.
- ⑭ Bryan, A.
1971 *Current Research; Mesoamerica American Antiquity Vol. 36.* p. 236.
- ⑮ Coe, M. D. and K. V. Flannery
1964 *The Pre-Columbian Obsidian Industry of El Chayal, Guatemala American Antiquity Vol. 30.* p.p.43-49.
- ⑯ Sheets, P. D.
1975 *A Reassessment of the Precolumbian Obsidian Industry of El Chayal, Guatemala American Antiquity Vol. 40.* p.p.98-103.
- ⑰ Michels, J. W.
1975 *El Chayal, Guatemala: A Chronological and Behavioral Reassessment American Antiquity Vol. 40.* p.p.103-106.
- ⑱ Rovner, I.
1980 *Comment on Bray's "An eighteenth Century Reference to a Fluted Point from Guatemala" American Antiquity Vol. 45.* p.p.165-167.
- ⑲ Bray, W.
1980 *Fluted Points in Meso-America and the Isthmus: A Reply to Rovner American Antiquity Vol. 45.* p.p.168-170.
- ⑳ Voorhies, B.
1978 *Previous Research on Nearshore Coastal Adaptations in Middle America in Prehistoric Coastal Adaptations; The Economy and Ecology of Maritime Middle America* ed. by B. L. Stark and B. Voorhies p.p. 5-21. *Academic Press* New York.
- ㉑ Lowe, G. W.
1977 *The Mixe-Zoque as Competing Neighbors of the Early Lowland Maya, in The Origins of Maya Civilization* ed. by R. E. W. Adams p.p.197-248. *University of New Mexico Press.* Albuquerque.
- ㉒ Lowe, G. W. op. cit. 1978. p.p.334-344.
- ㉓ Willey, G. R. op. cit. 1966. p.p.89-93.
- ㉔ 南米エクアドルのバルディビア (Valdivia) 遺跡や、コロンビアのプエルト=オルミイガ (Puerto Olmiga) 遺跡では、前3000年～前2500年頃と推定されている。また、メキシコのテワカン (Tehuacan) 谷の調査では、そのプロン (Purron) 文化層より、土器が発見されるが、これは、更に古いアブハス (Abjas) 文化層の石製容器と類似するものでメキシコ中央高地帯では、更に土器製作時期が古くなる可能性がのべられている。
- ㉕ 土器製作が一般化し、日常道具として固定化されたという事実は、農耕社会が成立して、農業という食糧獲得法が一般化されたという現象より、はるかに正確に認識することができる。従って、人間文化の技術的側面を重要視して、それを画期的な事実として評価する

わけである。

- ②⑥ Lowe, G. W. op. cit. 1977 p.p. 203-218.
- ②⑦ Hammond, N.
1977 *Ex Oriente Lux: A View from Belize in The Origins of Maya Civilization*
ed. by. R. E. W. Adams p.p. 45-76. *University of New Mexico Press.*
Albuquerque
- ②⑧ Lowe, G. W. op. cit. 1978 p.p. 347-351.
- ②⑨ Hammond, N. op. cit. 1977. p.p. 65-67
- ③⑩ Brainerd, G. W.
1958 *The Archaeological Ceramics of Yucatan* *University of California Anthropological Records* Vol. 19. *University of California Press.* Los Angeles.
- ③⑪ Lowe, G. W. *ibid.* 1978. p. 347.
- ③⑫ Coe, M. D.
1970 *The Archaeological Sequence at San Lorenzo Tenochtitlan, Veracruz, Mexico*
Contributions of the University of California Archaeological Research Facility
No. 8. p.p. 21-40.
- ③⑬ Lowe, G. W. op. cit. 1978. p. 350.
- ③⑭ Soconusco 地方というのは、メキシコのチャパス州及びグアテマラの太平洋岸低地の一部をふくむ海岸地帯の地理学上の地方呼称である。
- ③⑮ Coe, M. D.
1961 *La Victoria : An Early Site on the Pacific Coast of Guatemala* *Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.* Vol. LIII
- ③⑯ Weaver, M. P.
1972 *The Aztecs, Maya, and Their Predecessors: Archaeology of Mesoamerica*
p.p. 40-44. *Seminar Press.*
- ③⑰ Weaver, M. P. *ibid.* p. 40.
- ③⑱ Coe, M. D. op. cit. 1961.
- ③⑲ Lowe, G. W. op. cit. 1978. p. 352.
- ④⑩ ロッカー・スタンピング文様というのは、弯曲したやや鋭い、縁端部をもつ施文具（多の場合貝殻）を土器の器面上を前後に歩かせた時につけられた弯曲したジグザク文様をいう。オコス発見の、この文様は、M. D. Coe の分類によると数種類のものがあるが、施文技法は、いずれも同一で、施文具が違うだけである。
- ④⑪ ここでいう印章文とは、土製のスタンプを器壁上に押圧してつけられた文様一般をいう。土製スタンプには、各種のものがあ、スタンプ面に円、螺旋、渦巻、同心円、斜行線、動物などを陰陽刻したものを押圧して施文する技法である。
- ④⑫ Evans, C., B. J. Meggers, and E. Estrada
1959 *Cultura Valdivia* *Publicacion del Museo Victor Emilio Estrada* No. 6.
- ④⑬ Willey, G. R. and Ch. R. McGimsey

- 1954 Monagrillo Culture of Panama *Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology. Harvard University Vol. 49. No. 2. Cambridge.*
- ④④ CoeのLa Victoriaの報告書に見られるオコス様式の土偶は、頭部の表現が、コンチャス(Conchas)層の人形土偶と著しく異なっている。(同書92ページ及び図版39を参照のこと)
- ④⑤ Lowe, G. W. op. cit. 1978. p. 350.
- ④⑥ Lowe, G. W. ibid. 1978. p. 351.
- ④⑦ de Bore, W. R.
- 1975 The Archaeological Evidence for Manioc Cultivation: A Cautionary Note. *American Antiquity Vol. 40. p.p.419-433.*
- ④⑧ Maricruz, P. H.
- 1978 The Process of Transformation at Pajón: A Preclassic Society Located in an Estuary in Chiapas, Mexico. in *Prehistoric Coastal Adaptations* ed. by B. L. Stark and B. Voorhies p.p.81-95. *Academic Press. New York.*
- ④⑨ Maricruz, P. H. ibid. 1978 p.p. 85-91.
- ⑤⑩ Robert, N. Z.
- 1978 Long Distance Exchange and the Growth of a Regional Center on the Southern Isthmus of Tehuantepec, Mexico in *Prehistoric Coastal Adaptations* ed. by B. L. Stark and B. Voorhies p.p.183-210. *Academic Press New York.*
- ⑤① Robert, N. Z. 1978. ibid. p.p.188-192.
- ⑤② Lowe, G. W. op. cit. 1978. p. 353.
- ⑤③ Weaver, M. P. op. cit. 1972. p.p.42-44.
- ⑤④ Evans, C. and B. J. Meggers.
- 1966 Mesoamerica and Ecuador in *Handbook of Middle American Indians*, ed. by R. Wauchope Vol. 4. p.p.243-264. *University of Texas Press. Austin.*
- ⑤⑤ Lowe, G. W. op. cit. 1978. p.p.353-354.
- ⑤⑥ Lowe, G. W. ibid. 1978. p. 354.
- ⑤⑦ Lowe, G. W. ibid. 1978. p. 354.
- ⑤⑧ Lowe, G. W. ibid. 1978. p. 354.
- ⑤⑨ Weaver, M. P. op. cit. 1972. p.p.46-52.
- ⑥⑩ Pereau, F. B.
- 1972 Las Ciudades in *El Arte Olmeca, artes de Mexico No. 154. p.p.83-85. Mexico.*
- ⑥① Coe, M. D., R. A. Diehl, and M. Stuiver
- 1967 Olmec Civilization, Veracruz, Mexico: Dating of the San Lorenzo Phase *Science Vol.155. No. 3768 p.p.1399-1401. Washington.*
- ⑥② Weaver, M. P. op. cit. 1972. p. 51.
- ⑥③ Lowe, G. W. op. cit. 1978. p. 356.
- ⑥④ Lowe, G. W. ibid. 1978. p. 356.
- ⑥⑤ Sharer, R. J. and J. C. Gifford

- 1970 Pre-Classic Ceramic from Chalchuapa, El Salvador and Their Relationships with the Maya Lowland *American Antiquity* Vol. 35. p.p.441-446.
- ⑥ Sherar, R. J.
1974 The Prehistory of the Southeastern Maya Periphery *Current Anthropology* Vol. 15. p.p.165-187.
- ⑦ Thompson, J. E. S.
1976. Maya History and Religion *University of Oklahoma Press* p.p.124-158. Norman
- ⑧ Lowe, G. W. op. cit. 1977. p.p.197-248.
- ⑨ Weaver, M. P. op. cit. 1972. p.p.51-52.
- ⑩ Drucker, P. R., T. Heizer, and R. J. Squier
1959 Excavations at La Venta, Tabasco, 1955. *Smithsonian Institution Bureau of American Ethnology Bulletin* 170.
- ⑪ Laporte, J. P.
1972 La Ceramica in El Arte Olmeca artes de Mexico. No. 154. p.p.69-82.
- ⑫ Lowe, G. W. op. cit. 1977. p.p.212-218.
- ⑬ Stone, D.
1957 The Archaeology of Central and Southern Honduras *Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University, Vol. 49. No. 3. Cambridge.*
なお、ホンデュラスとグアテマラの国境近くを流れるウルア川谷の諸遺跡から発見される、把手付球形壺は、ユカタン低地系とも考えられる要素をもっている点は注意されなければならない。
- ⑭ Coe, W. R.
1965 Tikal: Ten Years of Study of a Maya Ruin in the Lowlands of Guatemala *Expedition* Vol. 8 No. 1. p.p. 5-56.
- ⑮ Coe, W. R.
1965 Tikal, Guatemala and Emergent Maya Civilization *Science* Vol. 147. No. 3664. p.p.1401-1419.
- ⑯ Willey, G. R., T. P. Culbert, and E. W. Adams (editors)
1967 Maya Lowland Ceramics: A Report from the 1965 Guatemala City Conference, *American Antiquity* Vol. 32. p.p.289-315.
- ⑰ W. L. Rathje は、低地マヤの領域を中核地帯と周辺地帯とに分けて、中核地帯の文明の発生についての仮説をたてた。W. L. Rathje: Praise the Gods and Pass the Metates: A Hypothesis of the Development of Lowland Rainforest Civilizations in Mesoamerica in *Contemporary Archaeology* ed. by M. P. Leone. p.p.365-392. (1972)メタテの材料と黒曜石と塩という三つの原料が、この低地帯での最大の必要物資であり、これら物資に関連する政治的、経済的な組織づくりこそがマヤ文明の中心的要素であるとして、熱帯圏に連続したマヤ文明の特質を資源の面から解明せんとした。

- ⑦⑧ Willey, G. R. others. op. cit. 1967. p.p.293-302.
- ⑦⑨ 1971年、セイバル遺跡に向った折、サヤシチェの部落で、把手付壺とテコマテ、形式的に明確でない多くの土器破片を原住民に見せられた。この中に「ひしゃげテコマテ」の破片が確認されたので、アルタル=デ=サクリフィシオスとセイバル両遺跡の中間に位置するサヤシチェにも、セー土器は存在したと考えている。
- ⑧⑩ Willey, G. R.
1977-b The Rise of Maya Civilization: A Summary View in The Origins of Maya Civilization ed. by R. E. W. Adams p.p.383-388. *University of New Mexico Press*. Albuquerque.
- ⑧⑪ Willey, G. R.
1977-a The Rise of Classic Maya Civilization: A Passion Valley Perspective in The Origins of Maya Civilization ed. by R. E. W. Adams p.p.140-146. *University of New Mexico Press*. Albuquerque.
- ⑧⑫ Thompson, J. E. S. op. cit. 1976 p.p.124-158.
- ⑧⑬ Lowe, G. W. op. cit. 1977 p.p.212-232.
- ⑧⑭ Bajo というのは、グアテマラのペテン地域などに見られる地形上の特性を指している言葉で、一般的には「低い所」を意味する。特に、マヤ圏に認められるバホ地帯は、乾季には殆ど水をたたえない低地であるが、雨季には、広い湿原地となってしまう場所である。マヤの南低地帯では、特にこのバホの自然地形を利用した初期、農耕期の栽培畑の特性が認められる。
- ⑧⑮ この点について、例えばセー土器の起源をグアテマラの南高地からの移住によって説明しようとする場合とその反対の場合とでは、河川、海岸の利用についての意味が大きくかわってくる。
- ⑧⑯ 例えば、テワカン谷の調査で判明したブロン文化層の土器には、短頸壺と皿形、丸底鉢形土器が多い。これらは、いずれもユカタン低地系土器と同一の系譜をもつものと考えられる。
- ⑧⑰ Willey, G. R. op. cit. 1977-b. p.p.384-385.
- ⑧⑱ Rands, R. L.
1977 The Rise of Classic Maya Civilization in the North-western Zone: Isolation and Integration in The Origins of Maya Civilization ed. by R. E. W. Adams p.p.159-173. *University of New Mexico Press*. Albuquerque.
- ⑧⑲ Willey, G. R. op. cit. 1977-a. p.p.140-146.